

Book Review 36-55 昭和天皇 #DJ ヒロヒト

『#DJ ヒロヒト』(高橋源一郎著、2024年)を読んでみた。著者は『さようなら、ギャングたち』で群像新人長篇小説賞優秀作受賞。『優雅で感傷的な日本野球』で三島由紀夫賞受賞。『日本文学盛衰史』で回伊藤整文学賞受賞。

まず、こんなタイトルを付けていいのかと驚愕してしまった。そして、分厚い(全648頁)。読了に1か月かかってしまった(時間がかかるても中断させない魅力が詰まっている)。昭和という時代に何が起きたのか、それが文学や文学者とどのような関わりを持っていたのかが、DJ風に描写される。井上靖、大岡昇平、小田実、折口信夫、等々。『#日本文学盛衰史』の内容を使っているようなので、そちらも時間を見つけて読んでみたい。井上靖は母校の先輩。取り上げられていた『敦煌』を再読したくなつた。

冒頭の南方熊楠との関係は大変興味深かった。南方の生きた時代は彼が推進する環境保護とアナキズムが同一視されていた。周囲の反対を押し切って、ヒロヒトは南方から粘菌の講義(この時代、粘菌の研究者はヒロヒトとその師匠、南方の3人しかいなかつた)を神島で受ける。

大日本帝国が天皇の教育に非常に気を使って臨んだことが窺い知れる。

死刑判決を受けたアナキストたち(過酷で悲惨な人生)へのヒロヒトの眼差しが優しく描かれている。

ヒロヒトの時代は戦争の時代だった。様々なエピソードを通じて、ヒロヒトを思いやりのある、思慮深い人物として描かれている。私は長らく「戦争責任を回避できた人物」としてとらえてきたのだが・・・。

昭和天皇とはどんな人物だったのか

昭和天皇(裕仁)は、日本の第124代天皇で、1926~1989年という異例の長期にわたり在位した人物。その生涯は、戦前の帝国日本→第二次世界大戦→戦後の民主国家という、日本史上もっとも激動した時代と重なる。

生い立ちと若き日の経験

- 1901年生まれ、大正天皇の第一皇子
- 幼少期から帝王学を学び、学習院で教育を受ける
- 1921年にヨーロッパを歴訪し、近代国家の制度や文化に触れたことは、後の姿勢に影響したとされる
- 1926年に即位し「昭和」が始まる
- 当時の日本は政党政治から軍部の台頭へと大きく揺れ動く時期
- 大日本帝国憲法下では天皇は「統治権の総攬者」とされ、軍の統帥権も持つ存

在だった
戦争と終戦

昭和天皇の評価がもっとも分かれるのがこの時期。

・満洲事変（1931）～日中戦争（1937）～太平洋戦争（1941）へと拡大する戦争の中で、天皇は軍の頂点に位置づけられていた

・1945年8月、ポツダム宣言受諾を決断し、玉音放送で終戦を国民に告げた

・戦争責任をめぐる議論は今も続くが、制度的な曖昧さが議論を複雑にしている
戦後の「象徴天皇」へ

戦後、日本国憲法の施行により、天皇は「日本国民統合の象徴」となった。

昭和天皇は戦後、

・全国巡幸（46都道府県）で国民を励ます

・欧州（1971）や米国（1975）を訪問し国際親善に努める

・生物学者として海洋生物の研究を続け、多くの論文を発表という、戦前とはまったく異なる役割を果たした。崩御と「昭和」という時代の終わり

・1989年1月7日崩御（87歳）

評価：★★★★★